〔研究ノート〕

コルセットと女性像

ーコルセットからの解放を中心にー

The Corset and the Image of Women : Liberation from the Corset

福　島　利 奈 子

Rinako FUKUSHIMA

Studies in Humanities and Cultures

No. 14

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷　14号

2011年2月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY

NAGOYA JAPAN

FEBRUARY 2011

〔研究ノート〕

コルセットと女性像

－コルセットからの解放を中心に－

The Corset and the Image of Women : Liberation from the Corset

福　島　利奈子
Rinako　Fukushima

要旨　現代ではあまり馴染みのないコルセットだが、昔の女性たちには欠かすことのできないものだった。コルセットの歴史は長く、中世以降、衣服における男女差が確立し、女性の身体の曲線美をコルセットの使用によって表現するようになった。一時は鳴りを潜めていたコルセットだが、その後復活し、女性には「女らしさ」が求められ、長く着用されていくことになる。女性は社会的に抑圧された存在であり、女性たちが求められた女らしさは、男性の視線によって理想化されたものであった。そして、人々が装うのは、身体を保護するというためだけではなく、社会的な属性や地位等の表現手段ともなっていた。その後、次第に女性の衣服改革が起こるようになる。女性のライフスタイルの変化が理想の女性像まで変え、自然で直線的な身体の表現へと移行した。第一次世界大戦を境に、より女性の社会進出は進み、仕事に適さないコルセットや丈の長い衣服は消えていく。その過程を、コルセットの追放に貢献したとされるアメリア・ブルーマー、ポール・ポワレ、ガブリエル・シャネルの三人に焦点を当てて検討する。以上の問題を踏まえて、近代から現代にいたるまで長きに亘って女性が身につけてきたコルセットとはどのようなものであったのか、そしてそのコルセット着用の要因と、それほどまでに広く普及していたコルセットを女性たちがどのように脱ぎ捨ててきたのかを考察する。

キーワード：コルセット、女性像、女らしさ、女性解放

はじめに

中世に衣服における男女差が確立してからというもの、それから20世紀にいたるまで、女性は長い間コルセットとともに時を過ごしてきた。女性は手を加えて身体を変形させ、その上に衣服を身につけるようになっていく。はじめは、貴族や上流階級の女性が身につけていたコルセットも、次第にあらゆる階級の女性が身につけるようになっていく。一時は姿を消していたコルセッ

トだが再び姿を現わし、再びウエストは締めあげられることになった。そのような中で、クリノリン、バッスル、Ｓカーブ・ラインなどのスタイルが生まれた。

そして、コルセットを身につけることにより、自らの地位や身分を、そしてまた、夫や父親の富を間接的に示す役割を担っていた。また、コルセットを用いて自らの身体を変形させることによって女性らしさを作りだしていた。女性の権利などほとんど認められていないような当時には、男性の庇護が不可欠だったため、女性は女性らしく振る舞い着飾ることが求められていた。そのようなところに、コルセットの使用が合致していた。

しかし、コルセットは現代の私たちにとって身近なものではなく、女性たちは現在に至るまでにコルセットを脱ぎ捨ててきた。それは、一体どのようにして行われてきたのか。女性がコルセットを着ていた時代から、身につけなくなっていく過程で、コルセットを追放してきた人物として、アメリア・ブルーマー、ポール・ポワレ、ガブリエル・シャネルの三人は服飾史の中ではよく取り上げられてきた。彼らが目指したものとは何だったのか、どのような意図で推し進めてきたのか、今一度捉えなおしたい。

第１章．コルセットの時代

１．17世紀まで

今日ではさほど馴染みのないコルセットだが、昔の女性たちには決して欠かすことのできないものだった。そのようなコルセットとはどのようなものであったのか、簡単に見ておきたい。

コルセットの歴史は長い。一体どのようにしてコルセットは生まれていったのか。古代には、全体的にドレープで体を覆う衣服が主流であり、女性特有の曲線を強調するようになるのは中世以降のことである。この頃から、男性がズボンを、女性がドレスを着ることで衣服による性の区別がされるようになる。16世紀になると、女性のドレスは上半身と下半身に分けられ、上半身はタイトなものに、その一方で下半身のスカートは大きなものになった。上半身にはボディス、スカートの下にはベルチュガダン（vertugadin、英語ではファージンゲール）を身に付けるようになり、特にベルチュガダンは、ときに巨大化しながら、ときに形を変えながらヨーロッパの各地に広がっていく。このように、女性の身体は、自然の姿ではなく手を加えられ、その上に洋服を身に付けるようになった。

17世紀になり、上半身は引き続きボディスによってきつく締められていたが、スカートの幅は狭くなり、ペティコートが着用されるようになる。このペティコートは３枚重ねて着用していたが、17世紀の後半にはこれを10枚重ねて着用することもあった。ボディスは、鯨の骨を使ったものを意味していた。この鯨の骨は、「鯨のひげ」と言われるものであり、実際には鯨の口の部分に生えている骨質のものである。一頭当たりの鯨からかなりの量[1]のホエールボーンが取れるに

[1] 一頭の鯨からは長さ３、４メートルのヒゲが約300本、総重量で1600キロぐらいとれる。

も拘わらず、コルセットの全盛期には鯨の絶滅が危惧されるほど捕鯨業を栄えさせた。しかし19世紀には、次第に鯨骨に代わってスチール等他の素材が使われ、取引高は減少し、鯨骨業界は大打撃を被る。そして、この張り骨使いと紐で締めるレイシングにより、ボディスが次第に本格的なコルセットになった。コルセットが作り出す形は、それまでのものと比べ女性特有の胸の丸みを表すものへ変化した。それまでつぶすように平らにしていた胸を強調するスタイルに変わったのである。

２．18世紀

18世紀には、コルセットはバストを持ち上げる機能と、豪華な装飾性の追求に向かう。この頃のコルセットは丈が長めであり、パニエ[2]という鯨骨を使用し膨らませた巨大なスカートと組み合わさり、タイトさとボリュームの差をはっきりと示していた。コルセットは本来、実際の身体のサイズよりも小さいサイズに引き締めるために着用するものであり、そのためにはかなりの力が必要になる。コルセットには、前でレイシングするタイプのものと、背中側でレイシングするタイプのものがあるが、とりわけ背中側の場合などには一人で着用するのはかなり困難であり、そのため、当然誰かの手助けが必要となる。これは、メイドや召使いが手伝っていたが、このコルセットを締める場面は、風刺画を描く画家たちにとり格好の画題となった。当時描かれた数多くの絵からも、レイシングの作業は締める側にとっても重労働だったことがうかがえる。

18世紀の後半には、あらゆる階級の女性がコルセットを着用するようになった。しかし18世紀の末になるとロココ風のフランス王朝のモード、そしてコルセットとパニエが姿を消す。ルソーが「自然へ帰れ」と説き簡素な生活を呼びかけると、人々の価値観が変わり、コルセットは医学的および教育上の見地からも非難の対象となった。女性たちにはシンプルなものが受け入れられ、コルセットの大きさは次第に小さくなった。

３．19世紀以降

ナポレオンが1804年に帝位についた後、ブルボン朝のモードが廃止された。そして、モードの主流は古代のギリシャ彫刻を規範とした新古典主義へと移った。女性の衣服は過剰な装飾から簡素なものへ、そして華やかな色から白いドレスへと変化した。それとともに、これまでの人工美とは打って変わり洋服の薄さを追求するようになる。ドレープ（ゆるやかな襞）のついたハイウエストであるドレスは、ラインがウエストから直線的なものとなり、人工的ではない自然のままの体型を表す着心地のよいものだった。自由や解放を目指していた社会にふさわしく、この時代の風潮に合っていたこのスタイルは、多くの人に受け入れられ流行することになる。

---

[2] スカートを膨らませる輪骨入りのペティコート、アンダースカート。形が鳥かご（panier）に似ていたことからこの名前で呼ばれるようになった。

しかしナポレオンが失脚した後、様式からモードに至るまでナポレオンが否定していたブルボン朝のものが再び復活し、それに伴い、女性の曲線美への価値観も復活し、ウエストは再び締め上げられるようになった。

19世紀の半ばになると、女性らしさを強調するためスカートを大きく膨らませることで華やかさを競い合った。そのため女性たちは、スカートを膨らませるために再びペティコートを使用し幾重にも重ねるようになる。このペティコートの厚さや重さにともない、これを身に付ける女性たちは多大な負担を被ることとなった。そして、この非実用的なペティコートを身に付けることで、その女性たちの夫の社会的な地位を示すことにもなった。この時、この巨大なスカートとのコントラストをなすため、当然ウエストを締めあげるための努力も復活した。

この大きなスカートのスタイルは、張りの強い素材から「クリノリン」と呼ばれた。19世紀の後半には、ペティコートを何枚も重ねるよりも容易に身につけられるクリノリンが普及した。1856年には、特許を取得した金属製で籠型のペティコートが、アメリカやイギリス、フランスで売り出された。その後、スプリング・スチールを使用した軽くて丈夫で比較的安価なものが販売されるようになり、各階級の女性たちに受け入れられていった。産業革命のおかげでクリノリンもスカートの布も大量生産され、それに伴い価格も下がり、様々な階層の女性が流行のモードを追いかけることが可能となった。このクリノリンは、その大きさゆえに当然大きな場所を取ることになり、部屋の出入りや馬車に乗る際には斜めに持ち上げなければならず、他にも、物をひっかけ倒してしまう等の苦労も伴った。多くの女性に受け入れられる一方、風刺の格好の材料ともなった。クリノリンは、家にいる女性をまるで人形のように美しく仕立て上げる道具のような役割をはたした。そして15年間ほど流行し続けた後、女性たちの生活や考え方の変化に伴い徐々に形を変えた。膨らみは次第に縮小し、前の部分は平たくなり、半クリノリンになる。そして、クリノリンの時代が終わった。

その後1870年頃になり、クリノリンに代わりヒップを強調するためのバッスルが登場する。これは形態が多種多様でヒップラインを強調する腰当のようなものである。これをペティコートの上からベルト等を使用しウエストに取り付けていた。前の部分は平らで後ろ側のみ膨らんでいる形からすれば、クリノリンに比べ多少負担が減ったように推測されるが、太腿の部分にまで伸びたコルセットによりウエストやヒップに対する拘束はより厳しくなり、特に腹部への締め付けはそれまで以上のものとなった。胸は高く持ち上げられ前に突き出し、ヒップは大きく膨らんでいるといった具合であり、椅子には浅くしか腰掛けることができなかった。このバッスル・スタイルは明治時代に日本にも取り入れられ、文明開化の象徴でもある鹿鳴館では、女性たちに社交服として着用されたスタイルである。19世紀の終わり頃は女性のスタイルは変化に富み、流行のサイクルが次第に短くなった。このバッスル・スタイルはクリノリンの後に10年程流行したが、次第に生活に対応できなくなり、1890年代には姿を消すことになる。

1890年頃には、女性たちはバッスルに代わりＳ字型のシルエットを好むようになる。バッスルのような人工的な膨らみからは解放されたが、新しくつくられた腿に達するような丈の長いコルセットを着用し、腹部を押さえつけバストとヒップを前後に突き出させるようなＳカーブ・ラインのシルエットを作り出していた。また、結婚する前の女性などは、ウエストのサイズを自分の年齢数以下に保つことが勧められていた。[3]これまで見てきたこのコルセットによる長年の拘束は、さらに第一次世界大戦のころまで続いていく。

19世紀にはコルセットの生産技術も進み、大量生産が可能となる。それと時を同じくして、ブルジョア階級や労働者階級の女性たちもコルセットを着用するようになったため需要も増大した。それだけでなく、農民の女性たちもコルセットを着用して労働を行うようになった。職人の手によるコルセットを購入することが困難な女性は、家でコルセットを手作りし着用した。需要も供給も身に付ける人々も数が増えるとともに、販売されたコルセットは価格帯や素材の種類が多様化し無限のバリエーションが取り揃えられるようになった。

ここまで見てきたように、中世から19世紀にいたるまで、コルセットの歴史は非常に長く続いてきた。コルセットは広く女性に身につけられ女性美の象徴とされていたものであり、これは紛れもなく、身につけることで「女性らしさ」を表現していた道具であるといえる。なぜ、身体を締め付け、決して着心地が良いともいえないようなコルセットが、これほど広く普及し、なおかつ長きに亘り身につけられてきたのか。

第２章．コルセット着用の要因

第１章でみたように、女性の間で広く、そして長きに亘り身につけられてきたコルセットだが、成人した女性や若い女性は当然のことながら、妊婦や成長途中の少女、そして小さな子どもまでもが身につけていた。なぜ、ここまでして女性たちはコルセットを身に着けてきたのか。これは、ただ単に服飾の変化の歴史ということだけで一括りにできる問題ではない。なぜなら、そこには、女性を取り巻く社会的な状況や、その時代ごとの文化など様々な要因が複雑に絡まりあっているからである。女性とコルセットが関わってきた歴史は長いがゆえに、時代により、その変化に伴いどのような意味でコルセットを着用してきたのかは、いくつかの理由が存在する。

一つには、コルセットを身につけることにより、自らの身分や地位を示していたのだと考えられる。コルセットは地位の高さを示すシンボルであった。もともと、コルセットは身体を締め付ける動きにくいもので、非実用的なものでもあるといえる。それゆえ、コルセットを身につけることで身体を動かす必要がないことを暗に示していた。何よりコルセットは身体を拘束するものであり、肉体労働に向くものではなかった。その後、あらゆる階層にコルセットが広がったが、

[3] 例えば、20歳の場合なら20インチ以下ということになる。１インチは約2.5センチメートルなので、この場合は約50センチとなる。

労働者などの庶民が身に付けるコルセットは前でレイシングをするタイプであったのに対し、上流階級や貴族の女性が身に付けるコルセットは後ろでレイシングするタイプのものであった。前でレイシングを行う場合ならまだしも、後ろでレイシングを行なうには当然ながら相当な力が必要であり、それには召使いらの力を必要とした。もともとはコルセットの着用の際には誰かの手助けが必要なものなのである。すなわち、コルセットは社会的な階層性の保持・顕示に役立ったといえよう。

それに加え、男性が自らは黒い衣服をまとい、さほど着飾らない代わりに、妻や娘たちを美しく華やかに着飾らせていたという点が挙げられる。そうすることで、彼女たちが働く必要がない存在であるということ、そして自らの富と地位を表していた。妻や娘たちが豪華なドレスを纏っていたのは、身体を保護するためではなく、むしろ夫や父親の富を示すためであった。女性はきれいに着飾ることで、階級の対面保持という大切な役割を担っていたのである。女性たちは動きにくく非実用的な衣服を着ることにより、自分たちがどのような身分であるのかを間接的に示していた。こうして、コルセットのステータス・シンボルとしての意味は比較的長く続いた。

他には、どのような理由が考えられるであろうか。その後、18世紀以降には、体形を整えてウエストを細くするためにコルセットを身に付けるようになった。そうすることで、女性たちは男性に対して、か弱さや女性らしさをアピールしていた。身体の一部分を強調したり、または逆に押しつぶしたりして身体へ変形を施すことにより、女性らしさを作り出していたのだと考えられる。

なぜ、女性らしさをつくり出すために、ここまで苦しい思いをしながらも身体を拘束しなければならなかったのか。さらに言えば、なぜ、男性に対して女性らしさをアピールしなければならなかったのか。そこには、女性の地位が関係してくるだろう。当時の女性たちには高等教育を受ける権利も、働く権利も、財産を管理する権利も与えられてはいなかった。女性が女性の力だけで自立ができるような環境など全く整っていなかったといっても過言ではない。現在の女性たちと比べてしまえば、自由などないに等しい状況であったといえる。そのような社会に生きていた女性たちには、男性からの庇護が必要不可欠だった。つまり、結婚である（場合によっては、愛人ということもあり得る）。結婚することによって、女性の地位が飛躍的に上がることはなくても、誰にも守られずに生きていくよりはよかったはずである。上流階級の娘たちが通う学校などでは、ウエストを細くすることも教育の一環として行われた。作法書でも、女性の身体は男性に比べて非常に厳しく規制されている。「女は男よりも、その外面性（身体、動作、表情、衣服、装身具）において判断され、価値づけられる度合いが高かった」[4]ということがいえる。男性にアピールする上で、女性たちに必要とされたのはやはり「女性らしさ」であった。その「女性らしさ」を作り上げるのに、コルセットが適していたというわけだ。男性に庇護されるべき社会的弱

[4] 小倉孝誠『＜女らしさ＞はどう作られたのか』（法藏館、1999年）、232頁を参照。

者の女性像に、コルセットの使用が合致していたといえる。

これまで見てきたように、コルセットの歴史は長く、それは、16世紀から20世紀まで続いた。コルセットの着用は、理想化された女性像に適合させるべく、半ば強制的に女性たちが身に付けていた（身に付けさせられていた）ようにも考えられるが、その一方で、そうではなく、女性たちが自らの強い意志を持って、積極的に自分たちを表現していたとも考えられるのではないか。先ほども述べたが、男性に対してアピールすることに関しては「女性らしさ」を利用していた。つまり、考えてみれば、女性たちは、「女性らしさ」というものが、男性たちを惹きつける要因になるということを分かった上で用いていたとも考えられるのではないか。ある意味では戦略的な一面も垣間見える。しかしその反面、この時代に女性が生きていくにはそうするしかなかったとも考えられる。

コルセットの歴史を跡付けていくと、それを着用してきた女性たちの「美意識」と深い関連性を持つことが推定される。社会的に要請された「理想的な女性像」と外形的な審美性の追及ともいえるコルセットには深い関係があったといえる。

しかし、当時はここまで普及していたコルセットも、現代の私たちがコルセットを普段日常的に身につけているわけではなく、さほど馴染みがあるわけでもない。そのように考えると、時代が移り変わる中で、女性たちは自らコルセットを外してきたわけである。女性たちは、どのようにしてコルセットを脱ぎ捨ててきたのか。

第３章．コルセットからの解放

１．ブルーマー

長きに亘り批判と嘲笑の対象であったコルセットを決して手放さなかった女性たちが、コルセットを脱ぎ始めた原因は何だったのか。

19世紀の後半に、従来の衣服に対して改革運動が起こるようになる。ブルマーで知られるアメリア・ブルーマー[5]もそのような衣服改革を起こした人物の一人である。彼女は、それまでのスタイルは女性を拘束するものだとして批判し、スカートの下に裾を絞ったズボンを履くという、当時としてはかなり斬新なスタイルを提案した。ただこのスタイルは物議を醸すこととなり、批判の対象ともなった。当時、このスタイルがさほど一般的に受け入れられていたわけではなかったが、徐々にスポーツの際に着る服として、また作業服として広がった。

ブルーマーは、「このスタイルを流行らせようなんて思ってもみませんでした。私のすることが文明社会の人々の興奮をかきたて、このスタイルに私の名前がつけられることになるなんて考えもしなかったことです。これはすべて新聞社がしたことです。ある社はほめたたえ、ある社は

[5] Amalia Jenks Bloomer（1818～1894年）アメリカのニューヨーク生まれの女性解放運動家。1849年の１月１日から、『リリー』（The Lily）という機関紙を発行する。その後、『ウエスタン・ホーム・ジャーナル』（Western Home Journal）の副編集長となった。

責めたて、ある社はあざ笑い、そしてある社は非難しました。ある人が使った『ブルーマー服』という名称が、私の着ていたような短いドレスにつけられてしまいました。私はブルーマー服のすべての権利を放棄して、真の発案者であり、その服を最初に公開した人の名前として、ミラー夫人を紹介したいと思います」[6]と述べている。これらの言葉からは、彼女の驚きととまどいが感じられるが、それだけ、このブルーマー服は反響が大きかったということがいえる。

先ほどの彼女の言葉の中に出てきたミラー夫人とは、エリザベス・スミス・ミラー[7]という人物のことである。日置久子の『女性の服飾文化史』によれば、ミラー夫人が、ヨーロッパへ新婚旅行に行った際に、療養所の入院患者が着ていた服を見た。それは、たっぷりとしたトルコ・パンツ（裾を絞ったパンツ）にスカートを重ねて履くというものだった。それ自体が重く、身体を締め付けるような当時の女性服から患者を解放するために医師が考えだしたものだった。彼女は、このスタイルをまねた服を仕立ててもらい旅行を続行した。そして、アメリカに帰国すると、これを見た彼女の従姉妹であるエリザベス・スタントン夫人[8]やブルーマーもこの新しいスタイルを大いに気に入り、同じような服を着るようになった。ブルーマーが機関紙『リリー』にこのスタイルを載せると、非常に多くの問い合わせがあり、『リリー』の発行部数を増やすほどになった。この反響はアメリカのみならず、ヨーロッパにまで広がるほどだった[9]。その一方で、ブルーマー服は風刺雑誌や漫画家の格好の画題となり、またスタントン夫人は父親や息子からこの服に対して異議を唱えられた。そして、ブルーマー服を着た女性たちは、男性や新聞、そして聖職者からも批判され、次第に肉体的にも精神的にも打撃を受けるようになってしまったのだった。スタントン夫人も、周囲からの圧力に負け、結局ブルーマー服を着続けることをあきらめた。日置によれば、ブルーマーと彼女の仲間たちがブルーマー服を着なくなっていった理由として、ブルーマー服が人々の心の中では女性の権利と結びつけられてしまい、彼女たちが本当に主張したかった良い教育、雇用機会の拡大、仕事に対する良い報酬を求める女性の権利向上という問題から注意をそらされてしまうことが承服できなかったからだ、とブルーマー本人が老後に語っている[10]。

彼女たちにとっては、ブルーマー服はあくまでも付随的なものであり、本来主張したい点は別のところにあったようだが、彼女たちが女性の権利拡大のために活動していたということも、逆にこのスタイルが人々になかなか受け入れられていかなかった一因かもしれない。アメリカで女性の参政権が認められたのは1920年、一部の州のみであるが選挙権が認められたのは50年も前の1869年のことだった。彼女たちが活動していたのは、それよりもさらにさかのぼった時期であり、彼女たちの活動、そしてブルーマー服が受け入れられるような素地がなかったといえる。そして

---

[6] 日置久子『女性の服飾文化史　新しい美と機能性を求めて』（西村書店、2006年）、101頁。
[7] Elizabeth Smith Miller（1822～1911）アメリカの女性解放運動家。
[8] Elizabeth Cady Stanton（1815～1902）アメリカの女性解放運動家。
[9] 日置久子、同書、99～100頁。
[10] 日置久子、同書、107～108頁。

残念ながら、その時代において一般的に普及するというところまではいかなかったが、彼女たちの運動には大きな意味があった。まず、女性の地位向上を目指した点、そして女性にとっての実用的な衣服を提案した点である。こうして、女性が自らを解放していこうという動きが見られるようになる。このブルーマー服は、その後、サイクリング用のパンツとして応用されていくことになる。日本でも明治以降、学校での女子の体操服として取り入れられ、それに付けられた「ブルマー」という名称も彼女の名前に由来している。

２．ポワレ

また、ポール・ポワレ（1879～1944）もコルセットの追放に寄与した人物として必ず名前が挙げられてきた。ポワレは、ジャック・ドゥーセやチャールズ・ワースの店で経験を積み、1903年に独立してパリにオートクチュール・メゾンを開いた。彼のデザインには、東洋趣味であるオリエンタリズムが取り入れられていた。それまでのオートクチュールでデザインされていたものとは異なり、より身体のラインに沿う、しなやかなデザインのものを作ろうとした。彼は、ウエストのラインを胸の下まで上げ、Ｓ字型のラインをやめ、自然なラインを提案したのである。彼はコルセットをつけなくても着ることができるようなシンプルなドレスを作った。ポワレは、「コルセットというしろものは、まさに鞘、もしくは枠のようなもので、身につけていると女性たちは喉から膝まで縛られているようなありさまだった。」[11]といい、「わたしはコルセットに対して闘いを挑んだ。（中略）最新型のコルセットは女性の体を二つの塊に分けてしまっていた。一つはのどから胸部で、もう一つは後ろに裾を引く腰の出っ張りである。女性の体は故障車を引きずる牽引車のごとき格好であった。」[12]ともいっている。彼は、自らがコルセットを追放する動きをとってきたとしているが、こうもいっている。「わたしはコルセットをはずし、胸部を開放したが、逆に足元のほうは束縛した。（中略）女たちは歩くことも、馬車に乗ることもできないと不平を言ったものだ」[13]と語ってもいるのだ。この足元を束縛したものとは、ポワレが発表したホッブル・スカートのことである。これは、足かせスカートともいわれ、「脚を細いスカートに入れて、よちよち歩きしかできないものであった」[14]という。しかしながら、とにかく彼の新しい提案が、センセーションを巻き起こし、結果的に女性をコルセットの人為的な歪曲から解放していった。

しかし、第一次世界大戦に参戦し、戦後サロンを再開したものの、社会状況によって人々が求めるものも変化していく中で、もはや彼のスタイルは通用しなくなっており、何度かの破産を経て財産を全て失うという結果に終わった。一時は、「ポワレのおかげで、パリのファッション業

---

[11] ポール・ポワレ『ポール・ポワレの革命　20世紀パリ・モードの原点』（能澤慧子訳、文化出版局、1982年）、39頁。
[12] ポール・ポワレ、同書、63頁。
[13] ポール・ポワレ、同書、64頁。
[14] 日置久子、前掲書、162頁。

界は安定期を迎えた」[15]というほどの地位を築いたにもかかわらず、今では一般的な知名度としてはさほど高くないのもこのような理由からであろう。

時期こそ異なるものの、ブルーマーもポワレも女性をコルセットから解放する動きに貢献していたというところは共通点である。ただ、社会的に大きく受け入れられていったのは、どちらかというとポワレの方であった。ポワレの方が時期としてはブルーマーよりも後になるわけだが、その頃にはコルセットから解放され自由になりたいという女性たちが、より増えていたのかもしれない。つまり、女性の意識が変化していたのだといえる。

しかし、ポワレは女性の権利拡大を訴えていたわけではない。彼の情熱は服作りに向けられたものではあるが、それ以上でもそれ以下でもない。もし、そうだとしたならば、コルセットから女性を解放する代わりに、脚を拘束するようなことはしなかったであろう。

この頃の大きな変化は、理想の女性像というものが豊かで豊満な女性から社会に進出した若々しくてスリムな女性に変わっていった、という点である。女性のライフスタイルの変化が理想とする女性像まで変えていったのだ。こうして「締め上げられた上半身と拡大された下半身」という美の価値観は消え去り自然で直線的な身体の表現へと移行していった。

しかし、女性たちがみな直ちにコルセットの着用をやめたというわけでもなかった。ストレートでシンプルなシルエットのドレスの下にも、小さなコルセットを身に付けていた。ただ、ほっそりとしたラインが理想とされるようになったことに伴い、これまでのようなコルセットによる拘束の必要性は少なくなるとともに、より自然な感じの着こなしを目指すようになっていった。こうして、体は真っ直ぐになり、ほぼ自由に動くことができるようになったのだった。

しかし、不思議なことに、このほっそりとした自然なラインがなぜかまた新たなコルセットを生み出すことになるのである。上のラインはいまだかつてないほど高い位置まで上がり、その一方でさらに下にも長く伸びていったのである。こうして、座ったりかがんだりすることだけでも困難が伴いそうなコルセットが生まれた。

そして、新たな下着が1900年代の初めに登場することになる。それが、現代の私たちにもなじみのあるブラジャーである。ほっそりとしたスリムな体型の女性は、このブラジャーとゴム入りのガードルだけで十分だった。ポール・ポワレもコルセットをやめてブラジャーを取り入れることを勧めていた。バストやヒップのラインを強調する必要のなかったこの頃のブラジャーにはワイヤーが入っておらず、強調するというよりも、むしろ平たくするためのものであった。

その後、1913年にグラマラス・カレス・クロスビー[16]という名前で知られた女性が、ワイヤー付きのコルセットに反発し、新しいブラジャーを考案した。それは、非常にやわらかく、左右の胸を自然に分けるものであった。彼女は1914年に特許をとり、製品化を試みたが失敗に終わり、

---

[15] リンダ・ワトソン『ヴォーグ・ファッション100年史』（桜井真砂美訳、ブルース・インターアクションズ、2009年）、331頁。

[16] メアリー・フェルプス・ジェイコブ（Mary Phelps Jacob、1891～1970）が本名。

結婚した後に特許を売却した。ただ、ぴったりとフィットする現代のブラジャーの基礎ともいえるものを考案した点において彼女の功績は非常に大きいといえるだろう。

そして、戦争は結果として、女性の解放をもたらした。第一次世界大戦を境にますます女性の社会進出は進み、そのために仕事に適さないコルセットや丈の長い衣服はますます消えていくことになる。男性たちが戦争で戦っていた間、女性たちはあらゆる仕事をするようになっていた。そうなると、当然これまで身に付けていたコルセットや長いスカートは邪魔になった。そして、徐々にコルセットは小さくなり、またスカートの丈は短くなっていった。女性労働者が多く雇われるようになったためにメイドの数が減少し、女性たちは人の手助けが必要な複雑な洋服や下着を身に付けなくなっていった。そして、女性の下着はシンプルになっていったのだった。小さくなったコルセットは、やがてガードルに代わっていった。だが、ガードルはコルセットよりも下の位置で身に付けるために、胸を支えることができない。コルセットはウエストを締め付けてはいたが、それと同時に胸を支えてもいたのである。こうして、これまでも存在はしていたが、現代のように普及はしていなかったブラジャーが、その時に改めて価値を認められることになる。コルセットが消えていくにつれ、ブラジャーは女性に欠かせないものとなっていった。

第一次世界大戦後の1920年代には、ギャルソンヌというまるで少年のようにボーイッシュでスリムな体形が目標とされる。このスタイルを作るために、丈の短いコルセットとともに身に付けるブラジャーが主流となった。しかし、彼女たちの好みは他の女性たちとは異なり、胸を平らにするようなブラジャーを身に付けていた。

３．シャネル

この頃、多くのクチュリエール（女性デザイナー）たちが活躍し、新しいモードを提供した。彼女たちは、新しい女性たちの心をとらえ、女性のモードを大きく変えた。

その中のひとりが、ガブリエル・シャネル[17]である。彼女は様々な職を経て、1910年にパリで帽子店を開業する。その後、ドーヴィルというリゾート地や、スペインに近いビアリッツでもブティックを開店させ、本格的にオートクチュールのデザイナーとしてデビューした。シャネルは、ジャージーというニット生地の素材を使って、ウエストラインをなくした新しいシルエットを作りだし、女性の身体を解放した。彼女は「真に実際的で快適な洋服を最初に女性のファッションに導入し革命を起こしたことに対して多大な功績がある」[18]のだ。1920年代以降に彼女が提案したスタイルは、着心地の良さ、ショート・ヘア、若々しくほっそりとしたストレート・ラインに短めのスカートと、ギャルソンヌ・スタイルに近いものだった。さらに、1920年代後半からは「シャネルは彼女のコレクションにスポーツ用、日常着用、そしてビーチ用のズボンを加え

[17] Gabrielle Bonheur Chanel（1883～1971）フランスのファッション・デザイナー。
[18] Valerie Steele, PARIS FASHION:A Cultural History, Oxford and New York: Oxford University Press,1988.p.244.

る」[19]ようになった。シャネルはデザイナーとしてはもちろんのこと、経営者としても並はずれた才能を遺憾なく発揮していたが、1939年に第二次世界大戦が始まると、香水とアクセサリーの部門だけを残し、他の店舗を全て閉店させた。

1930年代に入ってギャルソンヌ・スタイル（英語圏ではモダンガール・スタイルと呼ばれていた）は廃れていった。平らな胸は時代遅れであるとされ、当時のデザイナーたちは、もっとフェミニンなモードを生み出していた。これまでに身に付けられていた従来のコルセットは、大柄な女性が体型を整える場合にのみ使用されるようになった。

第二次世界大戦中には、物資の乏しさに伴い、一般の女性たちはコルセットを手作りしたり、古いものをリフォームするなどして過ごしていた。そして、第二次世界大戦が終わると、コルセットが再びブームとなる。

1947年、クリスチャン・ディオール[20]が「ニュー・ルック」を発表した。それは、戦争を経験した人々にとって、戦前のエレガントさを思い起こさせるようなロマンティックなものであった。世界中の女性たちの、戦時中に抑圧されていたおしゃれに対する心がその反動から一気に開花したのではないだろうか。また、「ニュー・ルック」は、コルセットによって作り出される細いウエストと、ペティコートで膨らませたスカートによって完成するスタイルだった。ディオールのドレスには、実際には、張り骨が入っておりコルセットを着用しなくてもよかったのだが、女性たちはウエストを少しでも細く見せるために何かしらのファウンデーション（整形下着）を身に付けていた。ディオールはこの「ニュー・ルック」によって、世界的な名声を得ることになった。第二次世界大戦後の日本には洋装化が進み、ディオール旋風は日本でも起こった。1953年にディオール一行が来日し、ファッション・トレンドに対する関心はますます高まり、日本の女性たちは積極的にファッションに関わっていくようになる。

ここで、シャネルが再び登場することになる。1939年に、一部を残してブティックを閉店させていた彼女だが、戦後の1954年にオートクチュールの世界に復帰した。彼女が71歳の時である。シャネルが復帰した理由は、1947年に「ニュー・ルック」を発表し、世界的な名声を得ていた「ディオールの独裁を排除するため」[21]であったという。彼女の考える女性の解放とディオールの考える女性の解放は違っていたのだ。実用的で機能性も兼ね備えた女性服をつくってきたシャネルには、ディオールがつくったコルセットを必要とするデザインを許すことができなかったのだろう。その後、彼女が発表したコレクションは、フランスやイギリスなどヨーロッパでは不評だったものの、アメリカでは大いに受け入れられ、第二次世界大戦後のキャリア・ウーマンたちに実用的で動きやすく、それでいて洗練されたモードを提供したのだった。

刻々と状況が変化していくモードの世界において、15年間もの沈黙を経て、再びトップデザイ

---

[19] Aileen Ribeiro, Dress and Morality, New York: Holmes & Meier Publishers,Inc,1986.p.160.
[20] Christian Dior（1905～1957）フランスのファッション・デザイナー。
[21] 日置久子、前掲書、195頁。

ナーとして返り咲くのが容易ではないことぐらいは簡単に想像がつき、彼女の並はずれた才能には驚くべきものがある。ただ、その才能以上に、女性のためのデザインができるのは自分であるという使命感を持ち続けていた点は、ファッションにおいても女性の身体の解放においても、多大な貢献をした人物であるといえるだろう。

ただ、シャネルは女性のための動きやすい服装を提案し、自身も結果的には当時としては実に珍しい女性実業家となったわけだが、そこまでの道のりには常にと言ってもいいほど、愛人の協力があった。愛人というからにはシャネルの華麗な男性遍歴の相手は、皆身分の高い男性ばかりであった。当時の風習からすれば、同じ階層に属するもの同士が結婚するのが当然のことであり、孤児院出身のシャネルが結婚できる相手ではなかったため、彼女が生涯結婚することはなかった。ただ、彼らのどの協力が欠けていても今日における栄光はなかったのではないだろうか。それほど、シャネルにとって彼らは重要な役割を果たしてきたのだ。

また、「女の服は男性にも気に入ってもらわなければならないから、観客としてなら男性もいいが、デザイナーとしてはだめだ」[22]という彼女の考えや、ニュー・ルックを発表したディオールに対して嫌悪感を示すなど、女性のための動きやすい服作りにはただならぬ意欲をみせている。しかし、彼女は女権論者ではなかった。コルセットに対しては違和感を持っていたとしても、声高に女性の権利を叫んでいたわけでもない。シャネルはただ、洋服としてのデザインを追求していたのである。女性のための洋服を作ることと、女性の権利の拡大を訴えることは必ずしも一致しない。

1960年代の後半には、女性たちはこれまでのように下着によって身体のラインを整えるのではなく、自らの身体自体をシェイプし、体型を保とうとするようになった。これは、今の時代の女性たちにも通じるような現代的な感覚である。こうした変化に伴い、この頃にダイエットという概念が確立することになる。考えてみれば、このダイエットという概念は、ある意味では豊かさの象徴でもある。皮肉なもので、豊かな社会になればなるほど、スリムな体形が好まれるようになるのである。こうして、女性たちは実際のコルセットではなく、目に見えないコルセットのような感覚を持ち続けることになる。

こうして、コルセットの一般的な下着としての時代は徐々に過ぎ去っていく。女性のスタイルやモードは、コルセットから解放されて大きく変化してきた。これらの流れを見ていると、女性の地位向上や活動範囲の広がりと女性の衣服からの解放度は非常に密接に関係している。そして、女性のコルセットからの解放には、多くのデザイナーや運動家たちが関わっている。この中には、男性だけでなく女性も含まれていた。現在と比べて女性の地位が低かった時代に、強い批判にさらされ嘲笑の対象となり、多くの困難に耐え忍ばなければならなかったにもかかわらず、強い信念を持って活動するということはそう簡単にできることではない。その活動が、たとえ当時は広

[22] 安藤正勝『二十世紀を変えた女たち』(白水社、2000年)、141頁。

く認められなかったことだとしても、現在からしてみれば大きな意味があったといえるだろう。

ここでみた３人の人物には、職業や目指すところは違っていたもののコルセットの追放に寄与したという共通点がある。そのアプローチは一様ではなかったが、結果的に彼らはコルセットを過去のものにしてきた。ブルーマーの時代ではなかなか手を出すことのできなかった女性たちも、時代を経るにつれ、ポワレやシャネルといった時代のカリスマの力を借りて、コルセットを外すことができるようになった。ポワレやシャネルは、ブルーマーのように女性の権利拡大を訴えていたわけではないが、彼らの実績をみれば、女性たちが実はコルセットから逃れたかったということがみえてくる。女性であることを強制されるようにして生きてきた女性たちは、女性である前にひとりの人間として生きることを望んでいたのだ。今現在の私たちが、自分の着たいものを自ら選べるようになったこと、女性だからといって着るものを強制されないことは、当時の状況と比べて大きく異なり、自由な意識を持つことができて幸いなことである。強制されるという感覚は、精神的な負担を伴うものである。その意味で服装自由化時代への幕開けを体現した彼らの功績は大きいといえるだろう。

おわりに

女性のコルセットからの解放は、何も始めから順調に進んでいたわけではなかった。女性の権利も認められていないような時代に、女性が主張することなど、当時は、まともには取り上げてもらえなかったことだろう。そのように考えると、ブルーマーらが活動していた時の苦労は尋常ではなかったことは想像に難くない。その時には、彼女たちの提案にたとえ賛成であっても言いだすことができなかったり、実際には着ることができなかった、潜在的な支持者もいたはずである。また、その頃の人々にとってはかなり斬新なスタイルであり、たとえ受け入れられなかったことだったとしても、女性がコルセットを外し、ズボンを履くという選択肢があるという可能性を人々に示す契機にはなっただろう。

そして、その後ポワレとシャネルが新たな動きを見せた。ブルーマーの頃より約半世紀が過ぎ、時代を経るにつれ、女性の考え方も変われば、社会状況も変化していっただろう。そして、女性たちがコルセットを外す舞台がいよいよ整ったのである。コルセットの全盛期から賛否両論あり、数多くの議論が行われてきたコルセットだったが、５世紀もの時を経て、コルセットの時代は終わった。

女性を解放するのか、女性をコルセットから解放するのかは、必ずしも一致しているわけではない。しかし、女性たちがコルセットを身につけてきた時代において、女性たちがコルセットを外すということは、女性が自由を得るということと、ほぼ同義であった。それほどまでに、コルセットは女性の身体を拘束していただけでなく、女性自体を縛り付けていたのだ。今日においても、女性が男性と全く同等であるかと言えば、そうとは言えないが、それでも外観を強制される

ことから女性を解放してきた彼らの功績はあまりにも大きい。

各時代におけるコルセットの位置づけや当時の女性観、女性の理想像について詳細な考察を行うためには、まだ文献的な裏づけと実証が不十分であるが、それらについては今後の課題としたい。

参考文献

青木英夫『下着の流行史』（雄山閣出版、1991年）
青木英夫『下着の文化史』（雄山閣出版、2000年）
安藤正勝『二十世紀を変えた女たち』（白水社、2000年）
飯塚信雄『ファッション史探検』（新潮社、1991年）
海野弘『ダイエットの歴史　みえないコルセット』（新書館、1998年）
小倉孝誠『＜女らしさ＞はどう作られたのか』（法藏館、1999年）
北山晴一『おしゃれの社会史』（朝日新聞社、1991年）
古賀令子『コルセットの文化史』（青弓社、2004年）
駒尺喜美編『女を装う』（町野美和、田嶋陽子、矢木公子、佐々木敏子、勁草書房、1985年）
Valerie Steele, PARIS FASHION:A Cultural History, Oxford and New York: Oxford University Press,1988.
丹野郁『西洋服飾史』（東京堂出版、1999年）
辻村みよ子『女性と人権　歴史と理論から学ぶ』（日本評論社、1997年）
戸矢理衣奈『下着の誕生　ヴィクトリア朝の社会史』（講談社、2000年）
成実弘至『20世紀ファッションの文化史―時代をつくった10人―』（河出書房新社、2007年）
能澤慧子『モードの社会史　西洋近代服の誕生と展開』（有斐閣、1991年）
日置久子『女性の服飾文化史　新しい美と機能性を求めて』（西村書店、2006年）
ベアトリス・フォンタネル『図説ドレスの下の歴史』（吉田晴美訳、原書房、2001年）
深井晃子監修『世界服飾史』（古賀令子、石上美紀、徳井淑子、周防珠実、新居理恵、美術出版社、1998年）
スーザン・ブラウンミラー『女らしさ』（幾島幸子・青島淳子訳、勁草書房、1998年）
ブランシュ・ペイン『ファッションの歴史　西洋中世から19世紀まで』（古賀敬子訳、八坂書房、2006年）
ポール・ポワレ『ポール・ポワレの革命　20世紀パリ・モードの原点』（能澤慧子訳、文化出版局、1982年）
松田祐子『主婦になったパリのブルジョワ女性たち　100年前の新聞・雑誌から読み解く』（大阪大学出版会、2009年）
南静『パリ・モードの秘密』（毎日新聞社、1968年）
アルベール・ロビダ『絵で見るパリモードの歴史』（北澤真木訳、講談社、2007年）
Aileen Ribeiro, Dress and Morality, New York: Holmes & Meier Publishers,Inc,1986.
リンダ・ワトソン『ヴォーグ・ファッション100年史』（桜井真砂美訳、ブルース・インターアクションズ、2009年）

（研究紀要編集部は、編集発行規程第５条に基づき、本原稿の査読を論文審査委員会に依頼し、本原稿を本誌に掲載可とする判定を受理する。2010年11月15日付）